「句会」を通して養う論理的批評力と思考力

國　原　信太郎

1. はじめに

現行の国語科における中学校学習指導要領では，「A 話すこと・聞くこと」，「B 書くこと」，「C 読むこと」全てにおいて，「言語活動を通して指導するものとする」とある。そのため，教育現場では積極的に学級やグループで話し合い，発表し合うなどの言語活動が行われるようになり，その成果の一端が国内外の学力調査の結果に表れるようになった。

しかし，その一方で「我が国の子供たちは判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べることはまだまだ弱い」と文部科学大臣諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」(平成 26 年 11 月 20 日)で指摘されている。さらに，「自己肯定感や学習意欲，社会参画の意識等が国際的にみて低いこと」も指摘されており，子どもの自信を育み，能力を引き出すことが必ずしも十分にできていないことが我が国の教育の現状として伺える。

このような指摘や現状を踏まえると，これからの国語教育では，判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べるための思考力や表現力を育成していく必要があり，そのような力をどのように育んでいかねばならないのかを考えていき，授業を組み立てていかねばならない。

そこで本稿では，句会という形式を活用し，句を論理的に批評・鑑賞することでその作品の世界観に迫らせ，また，根拠や理由を示しながら自らがイメージした世界観を説明できる力の育成を目指した授業実践の紹介を行い，その成果と課題を考察したいと考えている。

2. 指導の実際

①実施時期　　第 9 学年（中学 3 年生）後期（9 月）

②教材名　　「俳句の可能性・俳句十六句」(『国語 3』光村図書)

③授業目標　　俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く力や感覚を養う。

④教材について

本教材では，俳句に親しみ，また学習することで日本の代表的な伝統的言語文化である俳句についての理解を深め，尊重する態度を養い，そこから俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く感覚や力を養うことができると考えた。

俳句の学習で大切なことは，用いられている言葉ひとつひとつを解釈をすることではない。五・七・五という日本語の言葉のリズムに深く根差した俳句の定型は，日本人に脈々と受け継がれてきた伝統的な韻律美であるといえ，その韻律の美しさを読み味わうことが俳句の学習では最も重要である。さらに，厳選された十七音を手掛かりとし，想像豊かに読むことで，作品の世界観を膨らませていくことが必要になる。したがって，言葉のひとつひとつに追っていくという作品の解釈に終始するのではなく，自分自身のイメージや思いを大切にできる態度を本教材で育成し，俳句に対しての興味関心を養う必要がある。しかし，いくら自らのイメージや思いが大切だからと言っても，与えられた俳句を「思うように自由に鑑賞してよい」などと，各々の好き勝手に読ませるだけでは，もちろん学習効果は生まれない。

そこで，俳人宇多喜代子による解説文「俳句の可能性」を俳句鑑賞の視点として活用させたい。「俳句の可能性」に掲載されている俳句とその解説文によって，近現代の俳句についてのおおよそを理解して慣れ親しみ，その後，「俳句十六句」を読み味わう。

「俳句の可能性」は平易な文章で，俳句の約束事や特色を分かりやすく説明している俳句の解説文である。また，有季定型の俳句以外にも，自由律俳句や，無季俳句にも言及し，俳句の姿を広く紹介しており，この解説文を読むことで，俳句を味わうための基本的な視点や観点を学ぶことができ，主体的に作品に向き合う姿勢を育成することができる。

「俳句十六句」では，成立した時代の雰囲気を伝えながら，中学生という多感な時期の生徒たちの心に響くような作品が選ばれている。十六句は作者の生年順に並べられており，時代による俳句の変遷とともに，俳句に様々な姿があることも示されており，俳句の多様な魅力を感じ取ることができる教材となっている。様々な俳句に触れることで，俳句の解釈のみに終始することなく，自分の読みや考えを広げ，変容させ，より作品や作者に寄り添ったイメージを構築する基礎を築くことができる教材であるといえる。

⑤指導計画（7時間扱い）

・第1次　「俳句の可能性」　俳句のおおよそを理解し，親しむことで俳句への興味を持つ。

第1時　「俳句の可能性」を読んで俳句について理解し，筆者の主張を把握する。

第2時　俳句を鑑賞し，作者のイメージや思いを考える。

・第2次　「俳句十六句」　俳句を想像豊かに読み味わう。

第3時　「俳句十六句」から自分の心に響く俳句を見いだし，その情景や心情を思い描く。

第4時　前時に選んだ俳句から読み取ったこと，鑑賞したことなどの発表を行う。

・第3次　俳句を創作し，相互批評をおこなう。

第5時　与えられたお題から俳句を創作し，相互に鑑賞する。

第6時　前時に創作した俳句を披講し，句会を行う。（本時）

第7時　俳句鑑賞のポイントについて整理する。

⑥本時について

(1) 本時の目標

・句会という形式を通して，学習者相互が関わり合いながら俳句の言葉や表現を手がかりに，作品の世界観を豊かに想像し，その世界観を味わう。

・俳句の良さや世界観を聞き手が納得できるように批評し，根拠や理由を示しながら自分の考えを説明する。

(2) 本時の教材（本時に用いる俳句）について

本時は前時までに創作した俳句を用い，句会を取り入れた授業を行った。句会は，言語に関する感覚を鋭くし，自己表現力の向上に繋がることはもちろん，自分とは異なる作者の句を鑑賞することで論理的に批評する力や思考する力の育成にも繋がると考えたからである。

授業で行う句会の形式は「句合」とし，あらかじめ指定された三班から，一句ずつ句を披講し合いその優劣を競いあう方法で行った。各班が披講する俳句は，あらかじめ与えられた写真を見て，そこから創作する写真俳句とした。俳句を創作する際の大きなポイントは，「何を」，「どのように」詠むのかということである。

与えられた写真から俳句を創作するということは，この大きなポイント二つのうちの「何を」という部分で最初から大きな縛りがかけられているということになる。しかし，写真には目に見えるもの以外にさまざまな情報が隠れており，イメージできるもの，連想できるものが多い。また，「俳句の可能性」の中で宇多喜代子氏が「短い字数でいろいろなことが表現できるところに，俳句の可能性が秘められている」と述べているように，俳句はたった十七音であるが，そこに込めることのできる読み手の思いは非常に大きい。よって，写真と俳句が組み合わさることで，俳句のイメージがより一層広がり，深みを増し，写真の方も俳句が伴うことでそこに潜んでいる情報がより鮮明になってくる。写真を見て俳句を創作することで，写真だけでは伝えられない，俳句だけでは伝えられない，そういう世界観を構築することができるはずである。

そのような世界観をもった自分たちの俳句を，「俳句の可能性」に書かれた鑑賞の視点を手掛かりとしながら，句会という授業形態の中で相互鑑賞，相互批評する。お互いに鑑賞し合うことで，俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付く感覚や力を養うことができ，その価値を論理的に捉え，思考していくことで，披講された俳句の世界観をより深くイメージしていくことが可能ではないかと考えた。

(3) 指導法

十七音に精選された美しい日本語の響きがある俳句には，大きな魅力が溢れており，その魅力に気付かせることが指導上最も大切なことである。日本人に脈々と受け継がれてきた伝統的な韻律美が存在することに着目させ，詩や短歌の学習と同様，美しい日本語の表現や響きに慣れ親しむことこそが，言語文化の享受，継承，発展の一歩になり，言語文化を尊重する態度育成に繋がるからである。

さらに，俳句を学習することで，言葉や表現を手がかりとして想像豊かに読み味わう力を育成することもできる。そこで，授業では解釈や表現技法の確認といった学習だけではなく，想像豊かな読みを大切にし，さまざまな世界観や考えを持てるような指導を行った。しかし，どんなに想像豊かに読みを深めて作品や作者に対峙したとしても，作者が思い描く情景や思いと完全に一致させることは難しい。それは，作者が自らの知識や経験，感性などをフル活用して目の前の情景や状況から作品を生み出すのに対し，解釈する読み手は，自らの知識，経験，感性のみで作品の世界に迫ろうとし，肝心の目の前の情景や状況が欠落しているか

らである。

したがって，本時に行う句会で目指すべきことは，作者の世界観と読み手の世界観を完全に一致させることではない。俳句の言葉や表現を手がかりに批評・鑑賞を行い，そこから自らの読みや考えを深め，作品の世界観を豊かに想像し，その世界観を味わうことを目指させた。披講された句の解釈に終始するのではなく，作者の世界観に自分たちの世界観をいかに近づけていけるかということを意識させて句の批評，鑑賞を行わせ，根拠や理由を示しながら自分の構築した世界観を説明することができる力を身に付けさせたいと考えたからである。

学習指導要領では，第3学年「A話すこと・聞くこと」(2)「ア　時間や場の条件に合わせてスピーチをしたり，それを聞いて自分の表現の参考にしたりすること。」，「C読むこと」(1)「ア　文脈の中における語句の効果的な使い方など，表現上の工夫に注意して読むこと。」，「ウ　文章を読み比べるなどして，構成や展開，表現の仕方について評価すること。」を，俳句の相互批評，相互鑑賞を通して，達成することができると考えた。

また，授業は以下の「着眼」，「分析」，「一般化」という分節で構成し，「着眼」で発見した疑問を「分析」を経て，「一般化」で全体共有，自分自身の振り返りができるように組み立てた。

(着　眼) 句の優劣を考えるためにまず，生徒たちは，どの俳句がどのように優れているのかという疑問に直面し，その疑問解決に向けて論理的思考力を持ち，句をさまざまな角度から捉え，主体的・協同的に学習していく。

(分　析) 披講された俳句について自らの思考を元に論理的に鑑賞，批評を行う。その後班の中でそれぞれの鑑賞，批評を発表し，議論する中でさらに深い考えや，新しい考え方を導く。そうすることで，披講された三句に対してのイメージを深め，より深い鑑賞を行う。

(一般化) 改めて自分たちの班内で俳句を鑑賞をすることで，どの俳句がどのように優れているのか，リライトするのであるならば，どのようにリライトすればよいのかなど考えさせ，根拠をもって説明できるようにする。

(4) 本時の展開

分節	生徒の学習活動	指導者の支援及び留意点
着眼	・前時の学習を振り返る。 ・句会の準備を行う。	・前時の復習を行う。 ・本時は句会を行うことを伝え，準備をさせる。
	句会を行い，三チームから披講された句を読み味わう。	
	・各チーム句を披講する。 ・披講された三句を読み味わい，三句を比較しその優劣を考える。	・句を披講させる。 ・披講された三句を読み味わわせ，三句を比較させ，その優劣を考えさせる。
分析	披講された三句の優劣を考える。	
	・班の句を解説する。 ○披講班以外 ・着眼の過程で考えた自分の考えをもとに，班で俳句の優劣を協議する。 ・どのような観点で俳句の優劣を判定するのか考える。 ・各班が述べた意見を判定の観点，参考にする。 ○披講班 ・班内で俳句の解釈を改めて行い，終了すれば他の班に回り，質問を受けたり説明をしたりする。	・班の句を解説させる。 ・どのような観点で俳句の優劣の判定を行えばよいのかという疑問を持たせる。 ・披講された俳句についての意見を出させる。 ・言葉や表現，解釈から評価をしているようであれば，俳句に描かれている世界観を広げるように指導する。 ・班内で再度俳句の解釈をさせる。またそれが終了すれば，他班をまわり質問を受けたり説明をしたりさせる。

一般化	・披講された三句の優劣を判定する。 ・判定チームがその判定理由を述べる。 ・他判定者の意見を聞き，自分たちが気付かなかったこと，改めて考えたことについて考えてみる。 ・改めて三句について，詠まれている情景や作者の思いをイメージする。	・披講された三句の優劣を判定させる。 ・判定チームに判定理由を述べさせる。 ・他の判定者の意見を聞き，気付かなかったこと，改めて考えたことについて考えさせる。 ・改めて三句について，詠まれている情景や作者の思いをイメージさせる。

(5) 本時の評価

・俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりとし，想像豊かに読み味わうことができ，そこから感じ取った俳句の良さを聞き手が納得できるように批評し，説明することができたか。

⑦成果と課題

本授業では，俳句に用いられている言葉や表現を手掛かりとし想像豊かに読み味わうことを目指し，そこから俳句の良さや世界観を聞き手が納得できるように説明することを目標とした。

まず，着眼の過程では，披講された三句を比較することでそれぞれの句の優劣を考えさせ，分析の過程での土台を作り上げさせた。


班代表を集めて事前指導

次に，この土台を元に，分析の過程では各班で披講された俳句の優劣について話し合わせた。各班の話し合いの前に，代表者を集め俳句の分析において重要な視点や観点を確認させ，班での鑑賞がスムーズにいくように指導した。班活動では，お互いの句に対する世界観の違いを話し合わせ，句から受ける世界観の違いを批判的思考力を駆使し比較することで，どの句がどのように優れているのかを議論させた。

また，分析の過程における生徒たちの思考タイプを，句の世界観を重視する心象重視タイプ（Aタイプ），言葉や解釈，表現技法を重視する解釈重視タイプ（Bタイプ），直感や感覚といった経験的な考えや判断を重視する経験重視タイプ（Cタイプ）という3タイプに分類した。一つの班にこの3タイプの思考型の生徒を全て入れ，それぞれの思考タイプをぶつけ合うことで句の世界観を深めていくことが最も理想的であったのだが，今回の授業ではタイプを意識した班編成まではできなかった。しかし，AタイプやBタイプの生徒でも，自分たちの経験からくる考えや判断を織り交ぜて思考するCタイプ的思考をしている者も多く，結果的には多くの班でA～Cタイプ全ての思考を交らせながら句の分析を行い，その優劣を議論することができた。俳句の分析や解釈では，用いられている言葉の解釈に終始してしまうことが多いが，本時の分析過程では自分たちの経験や体験を作品に投影させ，その作品のイメージを創ったり，言葉から作品を解釈したり，切れ字から作品の主役となる言葉を推測したりと，さまざまな視点や観点から論理的に句の分析を行っている姿が見られた。


班の話し合い

披講された句の分析が行われている中，披講班は自分たちの句をさらに理解してもらい，さらに，班での分析をより深くしてもらうため，各班に披講した句の説明にまわらせ，それぞれの班に新たな分析の視点や観点を持たせるようにした。そうすることで，各班の話し合いでは話し合いの論点がずれることなく，より深く句の分析を行うことができた。このような活動の様子を見ていると，学習指導要領第3学年「C読むこと」(1)「ア　文脈の中における語句の効果的な使い方など，表現上の工夫に注意して読むこと。」，「ウ　文章を読み比べるなどして，構成や展開，表現の仕方について評価すること。」を達成できたと言える。


指導者のアドバイス


披講班が他班に句を説明

最後に，一般化の過程では，自分たちの班で分析した句の世界観を発表し，また，他の班の意見

や考えを聞くことで，改めて自分たちの班内での句の世界観を再検討させた。この時，句の世界観や優劣の説明を根拠をもって説明できる生徒が多く，個人活動，班活動を通して句の世界観をしっかりと構築することができていた。このことから，相互批評や相互鑑賞を通じて，学習指導要領第3学年「A 話すこと・聞くこと」(2)「ア　時間や場の条件に合わせてスピーチをしたり，それを聞いて自分の表現の参考にしたりすること。」も達成できたと言える。


班での話し合いを発表

4. さいごに

本授業の前後で俳句学習に関するアンケートを行った。授業前のアンケートでは「俳句に興味がありますか」というアンケート項目で「非常に興味がある」,「まあまあ興味がある」と答えたものは9名（有効回答数38名）であり，「あまり興味が無い」,「興味が無い」と答えたものは29名であった。実に75%以上の生徒が俳句に関して興味が無いと回答したのである。あわせて，俳句を最後に学習した時期を聞いてみたが，個人的に俳句を創っている生徒が1人いたが，それ以外の生徒は小学校で学習して以来の学習になった。さらに,「俳句を創ってみたいか」という質問では,「ぜひ創ってみたい」,「創ってみたい」が俳句に対して興味があると回答した9人だけであった。

しかし，今回の句会を終えて，改めて俳句に関するアンケートを行うと,「俳句に興味が湧いたか」というアンケート項目に対して,「非常に興味が湧いた」,「まあまあ興味が湧いた」という生徒が37名（有効回答数38名）であり，句会を通して俳句に興味を持たすことができたことは非常に大きな成果であった。

また，披講された俳句の世界観をイメージし，班活動や全体発表でその世界観を広げていた生徒たちの様子を見ていると，句会を行い，創作した俳句を相互批評・鑑賞させることは論理的批評力・思考力を育成するために非常に有効的であるのではないかという考えに至った。なぜなら，生徒たちは俳句の言葉や表現を手がかりに作品を論理的に批評し，その世界観をしっかりとイメージすることができ，班活動ではその世界観を根拠や理由を示しながら説明し，そこでさらに深めた世界観を元に俳句の優劣の判定を行っていたからである。

俳句を批評・鑑賞していくことで，俳句に用いられている言葉や表現の価値に気付き，そして，言葉や表現を通してその内容を論理的に捉え世界観を広げ，それを言葉で伝え合う力を育成することができ，さらに俳句に対する興味関心を養うことができた事は今回の授業の大きな成果であると言える。

今回の句会の授業で得たことを土台として，詩や短歌といった他の分野の韻文教材でも論理的批評力や思考力を育成できる授業を研究し，作品の世界観を深く味わうことができるような取り組みをさせていきたいと考えている。

（本学附属京都小中学校教諭）